

## 稲 作

## 「北海道 稲作に挑戦する人々」その5

磯谷郡蘭越町字共栄 大友 健氏

## 1. はじめに

ホクレン主催の「ゆめぴりかコンテスト」では各地区予選を勝ち抜いた地区金賞米が、全道コンテストに進むが、後志地区では「JA ようてい蘭越地区」が2年連続地区金賞米として全道大会に進んだ。

今回は、低タンパク米の高い出荷率 (図1) と良食味評価の高い後志振興局管内で米作りを続けている大友健氏 (写真1) にお話を伺うとともに、「らんこし米」生産の取組みについて町役場でお話を伺った。

## 2. 「らんこし米」の由来

蘭越町史によれば蘭越町が尻別村であった明治18年に米の試作が確認されたとの記述が

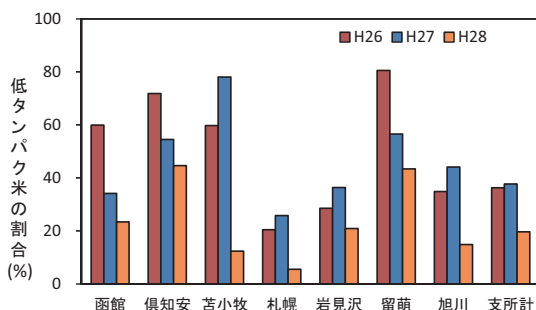


図1 地区別の低タンパク米集荷率 (ホクレン集荷分)



写真1 「ゆめぴりか」地区コンテスト 金賞受賞 (左から3人目が大友氏)

あるが、本格的に米の増産が始まったのは、大正7年ころからとされている。戦後の昭和20年代は食糧増産が進められた時代であったが、減反政策が始まる昭和40年代まで、増産が推進されてきた。一方、良質米生産については、上位等級米生産の推進や農業改良普及所の協力を得て、栽培技術の向上に努めていった。

「らんこし米」の呼称が蘭越町広報に載るのは昭和36年とのことで、産米の品質改善に取り組んできた関係機関、生産者の努力によって、この頃から良質・良食味米との声価ができてきたようである。(新蘭越町史より)

## 3. 「らんこし米」ブランドの更なる飛躍に向けて

蘭越町の水稲作付面積は約1,700haであり、おおよそ15万俵の米生産量があるが、個人出荷が多く、JA集荷は60%程度が現状である。

「らんこし米」は全国的にも良食味米との評価が高いが、個人出荷に負うところが多いようである。一方、地域全体で見ると個人出荷分にもJA集荷分にも品質のバラツキが見られるのも現状である。現在、「らんこし米」とはこれだという基準やガイドラインがなく、このことが大きな要因であると認識するとともに、今後の米生産にとっての重大な懸念事項であるというのが関係者の考えである。

そこで、生産・出荷についての栽培区分や品質区分の基準を設け「らんこし米栽培ガイドライン」を策定して、基準に基づくランク付けをすることにより、品質管理の取組みを示し、「らんこし米」ブランドの更なる飛躍を目指すこととした。

さらに、個人出荷の生産者が有する高い技術力による声価向上は貴重なものではあるが、

この取組みによる地域生産者の栽培技術の底上げと意識向上も大きな狙いである。

具体的な基準作りでは、消費者ニーズとして農産物に求められる最重要項目の一つとして安全・安心があげられることと、既に環境保全型農業への取組みがあったため、特別栽培米およびYES! clean米の実施を基準に取り入れるとともに、精米タンパク質含有率6.8%以下、グレーダの篩目等も取り入れた基準により差別化を目指している。

農薬成分使用回数を慣行栽培の1/2以下にするため、種子の温湯消毒（平成24年～）やフェロモントラップを利用して減農薬を実現している（写真2）。施肥量は窒素成分で化成肥料を5kg/10a以内とし、また、町とJAの補助事業によりケイ酸資材の施用を促進している。

特別栽培米の取組みが始まったのは、平成23年であるが、環境保全型農業生産団体「やすらぎと癒しの里」を立ち上げたのは平成27年であり、この頃から特別栽培米の取組みが拡大していった。当地域は経営面積が小さい生産者が多いうえ、米の直接支払交付金の平成30年以降の廃止や環境保全型農業交付金等の補助事業が背景にあると考えられる。

また、策定したガイドラインに沿った米生産がなされているかについての認証制度を設け、認証責任者を町役場に置くこととした。

#### 4. 大友氏の生産状況

大友氏は耕地面積約20haで、水稻約11ha、畑作約9haを作付けしている。本年の作付水稻品種は「ゆめぴりか」（4.5ha）、「ななつぼし」（1.5ha）、「きたくりん」（3.4ha）、「その他品種」（1.2ha）で、畑作では小麦・大豆・馬鈴しょ（含む種馬鈴しょ）・スイートコーン、子実コーンを作付けしており、大友氏ご夫妻とご両親の4名の家族労働である。

地域の気象の特徴は春先の強風、水温が低いこと、土壌的には適正施肥量範囲が狭いこと等があげられる（図2）。

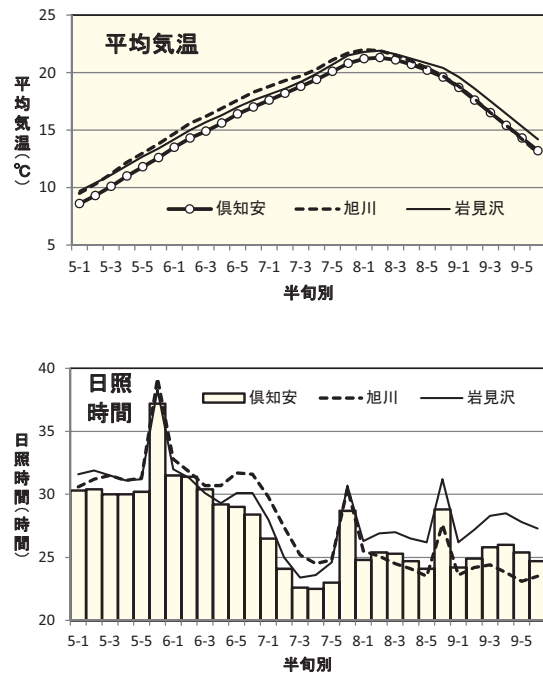


図2 後志の気象条件

(平均気温と日照時間の平年値の比較)

水稻は全て成苗ポットを使った特別栽培米で、施肥量はN7.2kg/10aで、全層N4.8kg/10aで、側条施肥N2.4kg/10a（33%）である。水田の透排水性改善のため、サブソイラーによる心土破碎および秋耕し（稲わらの秋鋤込み）を基本としている。また、本年からセンサーを設置して水田水温および水深のモニタリングをし、飛び地水田の水深管理を容易にしている。その他の先進的な取り組みとしては、試験的にラジコンヘリによるケイ酸資材の散布や代かき作業にGPSガイダンス機能つきトラクターも利用している（写真3、



写真2 フェロモントラップを活用したカメムシ予察



写真3 ラジコンヘリによるケイ酸資材の散布



写真4 GPSガイダンス機能つきトラクターでの代かき作業

写真4)。前年の収量は「ななつぼし」で500kg/10aで、タンパク質含有率は7%であった。

従前からの問題として残っているのが稲わらの処理であるが、地域の現状を考えると、高齢化や現行の機械装備から考えて、水田からの搬出は難しいため、稲わらの秋鋤込を推進し、併せて腐熟促進資材の効果的な施用に取り組んでいる。普及センターでは、大友氏の在住地域を拠点として、農業試験場の協力を得ながら進めており、稲わら処理の課題解決モデルケースとして取り組んでいる。

さらに、大友氏は地域一体となった「らんこし米」ブランドの維持・向上のための戦略会議において、委員として取り組んでいるとともに、水稻生産部会の副会長として若い力で、組織を牽引している。

## 5. 大友氏のコメント

「らんこし米栽培ガイドラインに基づき具



写真5 普及センターによる個別経営巡回

体的な基準をクリアして、さらに美味しく、間違いのない「らんこし米」を消費者の皆さまにお届けできるよう、町一丸となって取り組んでおり、「米-1グランプリ」「ゆめぴりかコンテスト」の二冠を「らんこし米」で勝ち取るのが当面の目標です。」と語っていただいた。

## 6. 普及センターの意見

蘭越町では、「らんこし米」ブランドの確立に取り組んでいる。その中で探究心豊かな大友氏は、普及センターの重点普及地域のキーマンとして、食味や減農薬栽培技術向上に向けた実証展示を果敢にチャレンジし地域の先駆者として活躍している。実証ほ場から得られた技術を地域に波及することで、「らんこし米」の評価を底上げし、目標としている「ゆめぴりか」コンテストの最高金賞受賞を目指してもらいたい。

また、北海道農業士として地域の若手経営者と共に、新たな蘭越農業の構築を図っている。転作作物では、土地利用型の高収益作物導入として、生食用「えだまめ」の栽培を始めた。また、転作作物の輪作対策として、子実用とうもろこしを試験的に導入した。

若手経営者の力を地域で応援し、水田地帯における所得確保に向けた新たな蘭越農業の営農スタイルを見つけ出してほしい(写真5)。

(文責 一般社団法人 北海道米麦改良協会 技監 相川 宗厳)